

Individual

女箱

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日尾和葉（週刊少年ジャンプ 2020年26号にて初登場。単行本未収録）が主役です。息抜き用なので更新速度のことを何も考えていません。

0
1

目

次

1

< < <

映像作品の終わりに流れる数多くの文字列を、ノイズとして捉えるのが日尾和葉の習慣だつた。下から上へ、あるいは右から左へ行進する名詞の羅列は、映像を汚すという理由で彼女にとつては有害ですらあつた。それらを美しいと思つたことのない感性を彼女自身疑つたことはない。必然、わざわざ見る対象としての立場が与えられることもなかつた。

しかしいま、彼女は強いエネルギーをともなつた感情とともにエンドロールを眺めていた。ある三つの漢字の並びはとくに和葉を苛立たせた。一度は？み込んだと思つた敗北がもういちど胸に火を灯す。自分の名前がその後に流れてくる事実が不快だつた。

< < <

道を行く和葉の姿に誰もが振り返るのが常だつた。素顔で歩けばもちろん、大きなサングラスをかけようが髪型を変えようがそれは変わらなかつた。夜道ですれ違つたつてそれは当たり前のことだつた。そのことは何も彼女が有名になつてからの話ではない。中学校に通い始めてしばらく経つたあとから、規模は小さかつたがその現象が起きてくるようになつた。

当時の和葉は美醜の区別をあまりつけていなかつたが（今でさえ同年代に比べてそこにこだわりがあるようには見えない）、彼女はいつも間にかそれを自然なこととして受け入れていた。

そしてそんな和葉が芸能界に見つかるのにそれほど時間はかからなかつた。

誰がスカウトのために声をかけてきたのかを和葉は思い出せない。そんなことはどうでもよかつたし、今でもどうでもいいと考えている。しかし客観視に優れ、外見の印象をはるかに超えて聰い彼女は、すぐにそれがチャンスなのだろうと察した。重要なことはその場所で金が稼げるかどうかということだけだつた。

結果だけを見れば和葉は才能に恵まれており、芸能界という環境は

性格を含めて金を稼ぐのにおそらくもつとも適していた。彼女にとつては当たり前のことすぎて、誰かにそういう特別なものがあると言われてもピンとは来なかつたがそれは確かにあつた。和葉がしゃべれば、その場が小さなグループであれ教室全体であれ、みんなが意識を向けずにはいられなかつた。川の流れが石を丸く削つてゆくよう、あらゆる視線が和葉の美質を磨いた。それは芸能界でさえ輝くにじゅうぶんなほどの光沢を備えていた。

だから彼女の美しさは力を湛えていた。

← ← ←

テレビのリモコンが直線軌道を描いてソファに呑み込まれる。わずかに弾み、位置が定まる。遅れて投げ出されるようななかたちで腰が収まる。ソファアが不満を訴えるようにぎしりと音を鳴らす。すぐにバッグが叩きつけられた。むちやくちな順番だつた。バッグを下ろすより先にリモコンを拾つて投げることの正当性を誰も説明できなかつた。おそらく和葉自身でさえ。

年齢を考えれば贅沢がすぎるマンショングリーンルームに次々と着ていたものが無造作に放り投げられていく。オフショルダーのトップス、黒いスキニーのパンツ、靴下、簡素な下着。受かるつもりがそもそもなかつたとはいえ、大きなオーディションに参加するための服装にはとても見えない。

「1・2人連れてる……？　冗談じゃない」

肌にやさしいナイロン製のタオルが壁にぶつかつて情けない音を立てる。まるでシャワーが苦痛であるかのように和葉の顔が歪んでいる。

髪を洗い体の汚れを落としたあと、彼女はわざとらしく湯船に行儀悪く入つた。オノマトペが直接目に見えるほどに。その原因は想像に難くない。それ以外に苛立ちのぶつけ先が他になかつたからだろう。髪も肌も雑に扱つてはいけないことはわかっているようだつた。他人から見て圧倒的な商売道具であることをさんざん言い聞かされてきたに違いない。和葉から見てまつたくの別世界にいるのは天使と呼ばれているスターくらいのものだつた。

「あいつ、……新宿ガールまで芝居だつての？」

机を叩くように水面を叩いた。湯がまっすぐ上に跳ねてぱたぱたと落ちてくる。叩きつけた拳は水中でまだ固く握られている。衝撃で揺れる湯船は和葉の裸を押したり引いたりしていた。しかし和葉はそんなことなど気にも留めていない様子だった。この入浴の時間終えたら、パソコンでもスマホでもどちらでもいいから新宿ガールの動画を、いや羅刹女も繰り返し見ようと心に決めた和葉にとって両作がネット上で公開されていることは苛立たしい幸運だった。デスアイランドも銀河鉄道の夜も、と言いたいところだつたろうがそれは難しいわがままだつた。

睨むように見つめる画面の先の夜凧景は明確にこちらに語りかけていた。ある意味でこの作品は失敗していると言えたかも知れない。本来ミュージックビデオとして撮られたはずのこの映像が、もとの音楽をBGMに押し込めてしまつていたからだ。

音楽を聴きながら楽しそうに夜凧景が駆ける。それが伝わる。これだけのシンプルなことがどうして世間を賑わせ、評価されているのかを理解している人間はあまり多くない。ハンドダイカラマによる一本撮りなのにあまりにも綺麗という技術面もあるだろう。しかしそれが本質ではないと和葉は理解していた。動作、目線、表情、その他こまごました要素。それらすべてを夜凧景は自分のために使つている。言い方を変えれば視聴者を意識していない。だから、ただ楽しもうで、下心が感じられないから視聴者も楽しそうだと共感する。誰かに見られているという意識を持つたうえでそれを感知させない技術は、役者としていわば土台に等しい。そうして初めてそこにあらゆる種類の美が花開くのだ。いまの和葉の目から見て夜凧景のそれは完璧だった。オーディションでの映像がフラッシュバックする。見てもらうための、見せない演技。

← ← ←

和葉は海底から観光に来たという男と山梨で会つたことがある。小学生の、どの学年だつたか、とにかく泊りがけの行事で行つた先での出来事だつた。賢い和葉はその男が言つてることが現実的でな

いことをすぐに理解したが、それはそれとして彼女はその中年男性が気に入つた。外見が特別に優れていたというわけではなかつたし、海底から来たという以外に興味深い話をするわけでもなかつた。だというのに事前に決めていた班から抜け出していった和葉は、その日の午後をずっと男と話して過ごした。

「海の、本当の本当の底はね、ちょっと光るんだ」

「ウソでしょ、深い海底に光は届かないってテレビで言つてた」

「違うんだ。海底の岩肌にはなんでも捕まえる苔の仲間がいるんだよ」

小学生の和葉はため息といつしょに首を横に振つた。

「無理ね。光つて信じられないくらい速いもの。目になんて見えないくらい」

「それができるんだよ、光は水中では遅くなる」

「そうでないと僕たちは生きていけない」と男は遠くの山を見つめた。和葉自身どうしてそこにいたのかはわからないが、おそらくのどかなところだつた。座つているのは駄菓子屋のベンチだつたが、あと十分も歩けば無人の野菜直売所がありそだつた。

「もつと前の話だよ。水圧で潰れちゃうじゃん」

「そうじやない。水圧を気にする必要はないんだ。だつて僕たちは海底に住んでいる。その僕たちがいまさらそんなもの気になんてしないさ」

道理だつた。信じるつもりはまつたくなかつたが、それでも別世界の常識をぽんぽん返されるようで楽しかつた。少なくとも教室でバカ騒ぎしている同級生よりは何倍も見どころがあつた。もちろん和葉の知性も完成されてはいなかつたから、質問やらやり取りのなかに明確な方向性を持たせることはできなかつた。けれども海底の話は時間が経つごとに掘り下げられていつた。

「僕たちにだつて近づけない場所はある。海底火山は危ないんだ」

「噴火するとどうなるの?」

「マグマと海水が触れるだろ、そうすると熱のせいで海水が一気に蒸発して爆発が起きるんだよ。それほど多いわけじゃないけど」

「思つたより海底の生活も大変そう」

「まつたく」

そのあとで和葉は班行動をせずに一人でいたことを叱られた。けれどそんなものはほとんど耳に入つていなかつた。上の空もいいところで、学校に帰つてから書かされる感想文にかなり困つたくらいだつた。クラスメイトにあの日何をしていたのかを聞かれもしたが、なんとかなだめて誤魔化した。正直に話しておかしくなつたと思われたら笑い話にもならない。とはいへ和葉にその程度のことが難しいわけはなかつた。

その経験から和葉はまつたくの無音が好きなもののひとつに入つた。海底を思い出すからだ。

← ← ←

オーディションに落ちた翌日になつても和葉の機嫌は悪いままだつた。受かるつもりがなかつたことに間違はないが、落とされたことにはまだ腹が立つていた。難儀な性格だつた。

役者として空いたスケジュールを埋めたいところだがそれは単純な話ではない。出演する作品があつてはじめて成り立つ職業だ。和葉にできることは待つことだけ。オファーが舞い込んでくるか、あるいはマネージャーが何かを見つけてくるかのどつちかだ。

劇団に所属していない和葉は稽古をしようにも個人的なものに終始するしかないというのが実情だつた。彼女にできることはこれまでに参加してきた作品の台本を読み返したり、作品そのものを振り返ることがそれにあたる。あるいは发声練習のためにボーカルレッスンのスタジオに顔を出すといつたくらいだ。実はドラマ収録に限つては大声を出すよりも纖細な声を聞き取りやすく発音するほうが難しく、そのトレーニングだけはまだ欠かせない。

しかしいま和葉の頭にはそのどれも浮かんでいなかつた。代わりに響いているのは夜風景の言葉だけだつた。12人を連れていると彼女は言つた。だから和葉はどこかからその12人を連れてきていいに違ないと考えた。どうせあれは比喩だとか言葉遊びができるような種類のものじやないだろう。では実際にかたちを持つた何か

を連れてくるにはどうするか。簡単だ。人間をその身に飼えればいい。やり方は見当もつかないが他人の人物像を吸収したと考えるほかない。

役者として負けたことを和葉が自覚したのはここだつた。あれは理論上、どんな役でも演れる。けれどどこか危ない感じもあつた。夜凧景が、というわけではない。そのスタイルが、だ。それも和葉は気に入食わなかつた。自分にできることもあつてどこかざるいような気がする。

歩いたからといって氣分が晴れるとも苛立ちが収まるとも考へてはいなかつた。ただ、家の中でじつとしていると余計に面白くなくななるだろうと思つただけのことだつた。代わり映えのしない部屋の様子なんて眺めて何になるものかというのが和葉の考えだつた。あるいはそれは物が少ないことも関係しているのかかもしれない。

あてもなくぶらぶらする、というのも厳密にやつてみようとするとな案外むずかしい。どうしてかそのことを知つている和葉はとりあえずの目的地を決めた。美味しいシュークリームを出す店があるのだ。パイ生地のシューが和葉は気に入つてゐる。

空はどうちらかといえば白かつた。青空は隙間からやつと覗いてゐる。半ば義務的に塗つた日焼け止めを馬鹿らしく思つて誰に向けるともなく和葉は苦笑いをした。

いつもならバスの窓から眺めるだけの風景の中を歩いていく。バスに乗つているときの頭の位置と道に立つてゐるときのそれに大して違ひなどないだろうと思つていたが、それは思い違いもいいところだつた。普段見ついているはずの景色から受ける印象がすっかり異なつてゐる。それは奇妙な感覚だつたが、ただそれだけのものだつた。だからといつて迷うこともないし、そんな新たな発見に感動するような性格をしててもいない。和葉は歩くスピードをちつとも落とさなかつた。

和葉はこのお気に入りの店を、芸能界の人間には一度も話したことはない。もしそうすれば何かヘンテコな特集を組まれてテレビで紹介されてしまうかもしれないからだ。和葉が嫌つたのは自分の判断

というものを持たない人間が大挙してこの店を訪れることだった。もしかしたら店からするとそのほうがうれしいのかもしれないが、勝手な彼女にそんなことは関係がなかつた。自力で見つけられるやつが来ればいいと本気で考えていた。それがたとえ自分には味がわからると思い込んでいるだけの勘違いさんであつてもだ。

メタリックの取っ手を握つて透明なドアを開ける。三十分もいれば酔つてしまいそうな甘い匂いがマスクの隙間から滑り込んでくる。店内を見渡してみるとそれほど客の数は見受けられない。単純に今日は平日だからなのだろう。レジで待たされないのは都合がいいとばかりに歩き出すと、隣から声をかけられた。

「ねえ、私、あなた知つてるよ」

百城千世子が立つていた。